

事業名

全国青少年体験活動推進フォーラム

団体名

国立妙高青少年自然の家

背景  
・  
課題

- (1) 2010年代を通じて、子供の自然体験の一部に、やや減少傾向がみられる。
- (2) 自立的行動習慣が身についている子供や自己肯定感が高い子供の割合は増加傾向にある。
- (3) 自然体験や生活体験、文化芸術体験が豊富な子供、お手伝いを多く行っている子供は、自己肯定感が高く、自立的行動習慣や探究力が身につけている傾向がある。
- (4) 就学前から子供の外遊びを奨励する保護者の働きかけに注目すると、その後の探究力の向上に肯定的な影響を及ぼす。
- (5) 外で過ごす時間の長さが、子供の肥満と近視傾向の抑制につながる可能性がある。
- (6) 社会経済的背景の相違に関わらず、自然体験が多い子供ほど、自己肯定感が高く、自立的行動習慣が身につけている傾向がある。また、公的機関等が行う自然体験活動に関する行事へ小学生が参加しない理由として、世帯年収が400万円未満の家庭は、経済的あるいは時間的な負担によるものが多くみられた。

事業趣旨

- ・体験活動等に馴染みのない青少年やその保護者に体験活動への興味・関心をもってもらおう。
- ・体験活動の指導者、青少年教育団体・教育施設等に体験活動を推進してもらおう。
- ・体験活動に関する普及啓発を行い、誰一人取り残さず全ての青少年に体験活動が行き届くようにする。

事業の内容

<企画委員会>

企画委員長 平野 吉直（国立大学法人信州大学 特任教授）  
 企画副委員長 伊野 亘（上越市立高田西小学校 介護員）  
 企画委員 中野 充（新潟青陵大学 准教授）  
 企画委員 瀧 直也（国立大学法人信州大学 准教授）  
 企画委員 小菅 江美（認定こども園森のこども園てくてく 園長）

- 令和6年7月8日（月） 第1回企画委員会（オンライン2時間）  
 企画・広報等の検討、事業実施計画・評価の検討  
 ・令和6年9月19日（木） 第2回企画委員会（オンライン2時間）  
 事業運営及び内容の確認  
 ・令和6年11月22日（金） 第3回企画委員会（事前打ち合わせ・対面2時間）  
 会場・運営マニュアル最終確認等  
 ・令和7年1月23日（木） 第4回企画委員会（オンライン2時間）  
 事業の振り返りとまとめ、報告書の内容及び送付先についての検討

<基調講演・体験活動>「夢につながる子供の頃の体験活動」  
 プレゼンター：ミツル&りょうた 氏 [「体験の風をおこそう」運動応援団キャラバン隊]  
 <セミナー&ワークショップ>

- ① 幼児の森あそび部会「アソビがマナビ！森が育てくれる」  
 コーディネーター：森のこども園てくてく園長 小菅 江美 氏
- ② 環境学習部会「山と森は環境学習の宝庫！国立7施設の取組紹介」  
 コーディネーター：特定非営利活動法人やまぼうし自然学校代表理事 加々美 貴代 氏
- ③ ICTと体験活動部会「体験活動 2.0！新しい自然体験のカタチ」  
 コーディネーター：新潟青陵大学准教授 中野 充 氏

<普及の実績>

- ・チラシ・開催要項の配布 4,167部
- ・フォーラム参加者 86名
- ・報告書の配布 300部
- ・ホームページ、SNS等での情報発信（チラシ、報告書、事業の様子の動画配信）



成果及び今後の展開

<成果>

- 基調講演・体験活動やセミナー&ワークショップを通して、子供と保護者が直接体験する場を設定したことで、体験活動等に馴染みのない青少年やその保護者に体験活動への興味・関心をもってもらえることができた。
- 子供や保護者が直接体験する姿を基に、体験活動の指導者、青少年教育団体・教育施設等が体験活動の効果や価値について実感を持った学びを深めることができた。
- 報告書の配布を通して、本フォーラムで得られた新たな知見を広く体験活動の指導者、青少年教育団体・教育施設等に向けて発信し、体験活動に関する普及啓発を行った。

<今後の発展性>

- ・企画・運営を通じて得た知見と経験を自施設の教育事業や研修支援に活用し、良質な体験活動の提供につなげていく。また、報告書等の資料を活用して体験活動の指導者、青少年教育団体・教育施設等に広報を行い、体験活動の成果等についての普及啓発を行う。
- ・フォーラムを通じて得られた参加者同士のつながり・連携をより一層強め、体験活動の指導者、青少年教育団体・教育施設等で情報を共有しながら体験活動の推進を図る。